

時評

最近、和辻哲郎の「風土」を読み直した。「風土」の思想は侵略戦争の思想的背景に利用さ



佐藤 洋一郎

(総合地球環境学
研究所教授)

静岡の風土

子孫に多様性残せるか

合わせて考えればその歴史観ははるかに具体的になると指摘しておられる。風土再考のときである。

和辻によれば、ユーラシアの風土は、モンスーン、沙漠、牧場の三つにわかれる。このうち「沙漠」は、過去「牧場」であった場所が破壊されてきた風

風土の観点からはこの二つの風土をまたいでいる。オオムギやネギ、カブなどの作物のもつ遺伝子の分布がそのことを示している。列島の北(東)部の品種と西の品種では、それらの性質や出自が明らかに異なる。そして北(東)の品種は麦の風土に、西の品種は稲の風土に、そのふ

えた森であるのに対し、後者は弥生文化を支えた森といわれる。むしろ縄文文化が直接麦の風土につながっているわけでは、森と文化の一体性はあきらかだ。

ここで大事なことは、静岡県には二つの森とそれに対応する二つの文化要素がともに残されている点だろう。とくに伊豆から富士山にかけての地域では、海沿いの森

が典型的な落葉樹の森であるのに対し、愛鷹山、箱根山の中腹や富士山麓には落葉樹の森が広がる。これに対応して遺跡も、

平野には弥生時代の遺跡が、そして山ろくには縄文時代の遺跡が分布している。このように県

観のみならず文化的景観が残されている。これを風土の観点で言えば、静岡の土地柄は、麦の風土と稲の風土という、ユーラシアをまたぐ二つの風土にまたがっていることになる。風土やその景観の多様性を、今に生かしつつ子孫に遺産として残せるか、それとも浪費して使い果たしてしまうか、その選択が今求められているように思う。

執筆者略歴

Yoneo Satoh 氏
京都大学大学院研究科修士課程修了、静岡大助教授を経て2004年4月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲と日本史」(角川書店)、「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。

土とも解されるので、ユーラシアは歴史的には二つの大きな風土に分かれるともいえる。私はこの二つを麦の風土と稲の風土と呼ぶのがよいと思っている。

さて、日本列島は稲の風土に属すると多くの人が思っているだろう。しかし日本列島は、地図の上では小さな列島ながら、

でいえば、前者は縄文文化を支

ることをもっているのである。日本列島の南北(あるいは東西)はしばしば議論されてきたところだ。たとえば森の分布がそうである。北(東)日本の森には落葉広葉樹が、西日本の森には低地を中心に常緑広葉樹(照葉樹)が多い。また歴史的な視点

もいうべき景観、それも自然景

れるなどしたため、特に戦後は余り顧みられることがなかったが、ユーラシアの環境やそこに成立した文明の多様性を八〇年も前に言い当てている点ですぐれた著作と思う。また最近では哲学者の梅原猛氏が、風土の概念に、農業のような生業を組み